

# 心豊かな世代が育つ

## 童話の里づくり

425

―シリーズ― あなたの人権・わたしの人権

### 「僕の将来の夢」

日出生小学校 6年

衛藤 大和

ぼくは、毎日牛飼いの仕事をしています。

ぼくの家は、牛を飼っていて、小さな頃からいつも牛たちがそばにいました。

じいちゃんが牛飼いをしているところを見ていると、「この仕事ってかっこいいな。」と思うし、牛はとてもかわいいと思います。

ぼくは、小学校一年生の頃に牛飼いの仕事を始めました。

最初は、牛のエサを運ぶ仕事から始まりました。何回も畜舎とエサのある所を往復して運ぶのは、大変な仕事でした。一輪車はとても重くて安定しません。

じいちゃんは、その間に他の牛にエサをやったり、世話をしたりして

いてすごいなと思いました。

じいちゃんみたいにいっぱい牛の世話をしてみたいと思うようになりました。

「一生懸命、一日中牛の世話をしているじいちゃんは、やっぱり何でもできるんだなあ。」

ぼくは、「これぐらいきつくない。」と自分に言い聞かせながら仕事を続けていました。

毎日毎日続けていくと、牛がとってもかわいらしくなってきた、仕事もたくさんできるようになりました。牛の堆肥をとったり、機械を使ってラップを運んだり、牛を外に連れ出したりする仕事もするようになりました。

生きものを飼っていると、ずっと生きもののそばにいないといけないので大変です。だけど、ぼくは、その仕事があまり苦になりません。堆肥の始末は、汚れるし、ずっと

同じ姿勢でかがむので腰も痛くなるけど、牛たちに気持ちよく過ごしてほしいので、毎日頑張つてやっています。

牛飼いの仕事は、きつくて汚れることも多く大変なイメージがあります。

しかし、ぼくは、じいちゃんの仕事をしている姿を見て、

「この仕事を将来の自分の仕事にしたいな。」

牛の赤ちゃんが生まれる時や牛の品評会でいい賞をもらった時はとてもうれしいです。新しい命が生まれその命がながっていく手助けをしているんだなと思います。

総合学習の時間に、「日出生の自慢」で、牛飼いの仕事について調べました。

じいちゃんの仕事を調べ、見たり聞いたりしているうちに、

「ぼくも品評会で賞がとれるような牛を育ててみたいな。」

牛飼いの仕事をしていると、つらいことやきついことがたくさんあるけど、牛が甘えてなめてきたり、たくさんのエサをたべてくれたりすることがぼくの励みになっています。

「日出生の自慢」である牛飼いの仕事をぼくのじいちゃんと同じように続けて、たくさんの命をつないでいきたいです。

それが僕の将来の夢です。

『失業した子どもたち』（生活に根差した労働から子ども姿が消えた）と言われてからずいぶん久しくなりますが、「お手伝い」ではなく、「仕事」と言う大和さん、大切なことをたくさん教えてもらいました。

この人権作文について、意見や感想、激励など、お寄せください。また、みなさんの投稿もお待ちしております。

わたしたちをとりまく様々な不合理や差別について気づいたことや感じたことを、二〇〇字程度にまとめてみましょう。住所、氏名、連絡先電話番号を記入して（匿名可）、玖珠町教育委員会社会教育課「あなたの人権・わたしの人権」までお届けください。

